図書学辞典

長澤規矩也編著

三省堂

長澤規矩也編著

図書学辞典

三省堂

図書学辞典

昭和五十四年一月二十日　第一刷発行

編著者　長澤規矩也（ながさわ・きくや）
茅ヶ崎市菱沼一、五九二

出版者　長澤規矩也先生喜寿記念会
千代田区飯田橋二ノ五ノ四「汲古書院」内

発行者　株式会社 三省堂　代表者　上野久徳

印刷者　株式会社 共立社印刷所

発行所　株式会社 三省堂
〒一〇一 東京都千代田区神田神保町一の一
電話 東京（〇三）二九三一三四一（代）
振替口座 東京六一五四三〇〇

©1979 by Kikuya Nagasawa

落丁本・乱丁本は発行所でお取替えいたします

序文

旧冬から病臥し、両月有余の検査の結果、三月十六日に右腎臓を剔出したが、斎藤・シータン両博士のお蔭で元気となった。そこで、全快祝を兼ねて、喜寿の宴を張りたいという知友の申し出を受けることになった。私としては、九月以降を望んだが、種々の事情で、七月二十二日(土)となった。

かねて発起人からは、喜寿の記念として、本書の編刊を望まれたので、実は六月に筆を起こしたのであったが、半年の病休中の課業の補充に多忙で、筆を執っては擱き、擱いては筆を執ったため、表現形式に前後多少の矛盾を生じ、遺憾の箇所もあるが、著者として、原稿を印刷所

に送ったからには、校正中に原稿を改めるべきではないという信条の下に、そのままにしたところが多い。ただ、索引の完成は数人でまとめたため、不統一を生じたので、多少原稿を改めたことは担当工員諸君におわびする。

進んで印刷を引き受けて下さった共立社の春山社長に謝意を表するとともに、表現の整備統一などに格別の御配慮を賜わった三省堂の田中三雄君に感謝する。

尚、記念の宴の御案内状が私の予期しない方々へ送られて、御迷惑を掛けた向きに対して失礼を深謝する。

昭和五十三年十二月

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

凡例

一　「辞典」という書名からは、本書のような排列でなく、五十音順などによるべきであるが、収録の術語中には、当用漢字の教育を受けている人の読めないような漢字が少なくない。しかし、その術語がどんな性格のものであるかは分かっていることが多いので、このような編修方法を採った。

一　用語解説だけでは不十分と思われるものについては、参考・説明・注意などの項目による叙述を加えてこれを補い、世上で誤解されているようなものについては、特に「正誤」の一項を加えた。しかし、執筆が、約半年間にわたってしまったため、前後統一を欠いたところがあるのを恥じる。

一　用字については現代表記に拠るべきであるかも知れないが、術語の中には、漢字書きが学界・館界で行われているものがあるので、例外もある。特に、術語の送り仮名については、これを省略したものがあることをお断りする。

一　当用漢字字体表の制定以来、印刷所の活字の字形、工員の頭脳が混乱して、原稿通りの植字が難しくなった。原稿そのものも混乱した。漢民族の姓名はもとより新字形で記すのは妥当を欠くと信ずる。又、中華人民共和国の地名を、本邦常用の字形を使っては正確を欠く。書名は原本使用の字形に拠ることが慣例となっているが、ある特定の版本を指すものでなく、古書を指す場合には新字形に拠ってもよいと考える。

一　そこで、原則として、次の各項などについては、特に旧字に拠ったつもりである。

古今人の氏名。

共和国の地名。

活版に拠った新書で、原本に旧字が使用されている書名。　など。

今回は隣邦の年号などは新字を使用した。

一　今日の活字製造所や印刷所で

ア　旧字と称しているが、実は、戦前の一般の印刷所では常備されていなかった字形。

併・研・免・晩・冒・帽・勺・凡・均・卽・郷・旣・慨・概・節・姫・次・姿・愉・愈・諭・成・城・盛・敕・潛・澀・晉・簡・纖・讖・覆・褒・負・贊・閒・鬪　などの類。

イ　二様の活字がかなり広く使われていた字形。

回(囘)・挿(插)・戯(戲)・流(流)・確(確)・鶴(鶴)・秘(祕)・録(錄)・塩(鹽)・亀(龜又ハ龜)・教(敎)・彫(雕)・豊(豐)・衛(衞)　などの類。

ウ　活字はいわゆる旧字であったが、書くときは、新字形又はそれに近い字形で書かれていた漢字。

又・父・交・史・八・分・谷・益・全・半・伴・判・平・坪・畔・評・兼・謙・券・勝・咲・朕・尊・悦・脱・説・肖・削・謄・隊・鎖・婦・尋・掃・急・雪・毎・侮・悔・敏・梅・海・彦・顔・産・害・割・轄・戸・房・所・編・採・援・浮・乳・渓・緩・服・朗・郎・炭・呉・娯・誤・寒・炭・唐・周・調・虚・普・譜・青・晴・精・請・麻・内・丙・納・聖　などの類。

こういう類について、又、一画の差によるものなどについては、多少不統一のままにした。

一　巻頭の五十音順の索引については、多少、便法に従った。同音については清音を前に、二字以上の同字のものは、次行に——を使った。この統一のため、採字組版の諸子に御迷惑をかけたことは遺憾千万である。

あとがき

長澤規矩也先生の喜寿祝賀記念会が、丸の内の山水楼で開かれたのは、今年の七月二十二日であった。当日、祝賀に参集された方々は約一三〇名で、先生御一家を囲み、なごやかな雰囲気の中で時を過ごした。参集の方々は、つねづね先生と御親交のあった方々なので、祝賀の辞に加えて、先生のいろいろな逸話など伺うことができ、先生も時おり頬を綻ばせていらっしゃった。先生の御交際の範囲が広いだけに、各方面でのいろいろな逸話があることと思うが、それを全て承るだけの時間がなかったことは、返す返すも残念である。しかし、話題も数多く出て、終始、先生を初め御一家の皆様に、楽しい時を、また思い出の深い時をお過しいただけたことは、何にも勝る喜びであった。

初め、記念会の準備委員会では、六月の設宴を予定していたが、種々の事情などもあって、急に暑中の七月に日取りを定めた。そのため、諸方への御案内に疎漏があったようである。その点、この紙面を借りてお詫び申し上げる。

祝賀会の席上、この祝賀の意を永く記念するため、長澤規矩也先生喜寿記念会の名のもとに、先生の御著述を出版する動議が提出され、出席者全員の賛同を得た。その時の書名はいずれも仮題であったが、書誌学辞典および著作選集の二部である。このうち書誌学辞典が、図書学辞典の名のもとに出版されることになった。この辞典は、先生が図書学の基礎的術語を集め、それに解説を付けられたものであって、かねがね図書館漢籍の整理に東奔西走された先生の調査研究の中から生まれたものである。この書物が、図書学を専門にする人々および漢籍に接する人々に対して、大いに益するところがあるのは言うまでもないが、それとともに、記念会の申し出を早々に実現して下さった先生の御厚意

に心から御礼申し上げる。他の一部、著作選集の出版についても、近い将来において、その約束をお果たし下さることと思うが、御大病の後であり、準備に御無理なさらぬようお願いしたい。

わたくしが先生に初めてお目に掛ったのは、昭和五年、先生が旧制第一高等学校に教授として就任された時で、その時わたくしは第二年目を迎えた生徒であった。最初の授業は春秋左氏伝の講読であった。先生は講読の始まる前に、春秋の経文のことから三伝にわたって詳細な説明を加えられた。高等学校の二年生に専門的な話を聞かせて下さったのである。その時の印象が、今でも、はっきり脳裏に焼きついている。

そのころ、先生はすでに書誌学方面で御活躍になり、昭和八年には学術誌「書誌学」の発刊を見るに至った。その後、書誌学方面において、先生は着々と業績を積み重ねられた。その後、書誌学を図書学と改めて、そのお仕事を日

に月に進められている。先生には、図書学関係以外の著述や編纂も多い。それらの書物を集めたならば、まさに汗牛充棟の趣きを成すことであろう。

先生は今年喜寿を迎え、なお若者を凌ぐ健康を保持されているが、何としても御大病の後、御自重専一に遊ばされるよう祈って止まない。

昭和五十三年　冬

受業　市川安司　記

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

図書学辞典　目次

序説……一
装訂……八
大小……二八
写本……三三
刊本……四一
部分……八六
テキスト……一〇七
雑……一一九
分類……一二五

附録
干支異名表……一五三
十二月異名表……一五四
避諱缺筆法……一五六
参考文献……一六一
あとがき

図書学辞典

——和漢書誌学用語早わかり——

長澤規矩也編著

序説

としょがく 図書学　図書を対象として、これを科学的に研究する学問。書誌学。田中敬に「圖書學概論」（大正一三、東京、冨山房）という著書がある。

説明 これを、私なりに具体化すれば、次のような事項が調査研究の対象となろう。

一、図書の定義、範囲、種類、起原、発達、等。

二、図書の材料、形態（大小、様式）、装訂、付属物、等。

三、書写及び印刷の材料、様式、方法、種類、歴史、等。

四、内容（テキスト）の成立（著述、編修、翻訳、図表の作製）、種類、校訂、伝来、存亡、等。

五、図書の集収、保存、分散等に関する事情、方法、歴史、等。

六、文庫と図書館との相違、発達、種別、建築、等。

七、図書整理の原理、方法、歴史、等。

(1)選択法　(2)目録法　(3)分類法　(4)排架法。

八、著作権・出版権・販売権等、図書に関する法律規則。

九、図書を対象とする各種の企業（編修、印刷、製本、出版、販売、貸本等）。

しょしがく　書誌学　図書学（前項）の旧称。前項の説明の中の、第一至三項を特に指すことが多い。Bibliography

説明　もと、わが国では、史学の補助学として、書史学と称していたが、書物の歴史ばかりでなく、書物全体についての学問であるというので、大正末期から、こうよぶようになった。

しょしがく　書史学　書誌学の旧称。

もくろくがく　目録学　清代以降、書誌学的研究を指した漢語。

説明　この称は、清代の学者王鳴盛が、十七史商権巻一の中で初めて使った語であるといわれ、彼は、目録の学は、あらゆる学問の入門の学として大切なものであると言った。

はんぽんがく　版本学　目録学の俗語。

注意　「版本」というが、写本をも含む。

こうかんがく　校勘学　校讐学。㊀同一書の各種伝本間における字句の異同を調べ、できるだけ、その本の原本の姿を再現しようとする学問。㊁清代の学者章學誠が信撫という著書の中で、目録学とほぼ同義に使った称。

注意　後人は専ら第一義として使い、第二義には使わない。第一義は、清代に盛行した考証学の一派で、顧廣圻のごときは、こ

れを専業とした。

ぶんけんがく　文献学　　文献を対象とする学問。

正誤　わが国文学界では昭和初頭以来、書誌学とほぼ同じ意味に使われているが、正確ではない。

説明　文献にもいろいろ意味があるが、この場合、言葉に対して、書いたものの意。

参考　わが国文学界で文献学の称を使うのは、昭和初頭に書誌学的研究を始めた池田亀鑑博士が、図書館界と全く没交渉であったからで、これに反して、漢文学界では私が、図書館界と密接な関係を作ったので、早くから、書誌学という称呼を使って来たのである。

としょ　図書　㊀今は書物と同義。㊁史記の蕭相家世家に見える用例は、漢書高帝紀に同じ事実を図籍と記してあるので、絵図と書類とでもいうべきものをまとめて称したらしい。

しょせき　書籍　図書。書物。（後漢書、馬融伝）。

しょもつ　書物　図書。書籍。（後漢書、戴封伝）。

てんせき　典籍　書物。（孟子、告子下）。

しょ　書　㊀書物。㊁文献。書いたもの。（易、繫辞下）。

ほん　本　㊀古義は、転写又は校合に使った底本。㊁書物。（後漢書、延篤伝、注）。

ふみ　典籍　典籍の古訓。（日本書紀、應神紀）。

もののほん　物の本　書物。（北條早雲、二

十一箇条)。

参考　曲亭馬琴に「近世物の本江戸作者部類」という本がある。

もんじょ　文書　特定の相手に向けて出す書類。手紙・触れ文など。「古――」

ぶんしょ　文書　書類。役所の文書係の場合はこの意味。漢語の本来の意味もこの義。

きろく　記録　自分たちの心覚えに記した書類。役所の勤務日誌や書き留めなどは、この中に入る。

参考　図書というものは、見方によってはこれら、文書と記録との中間にあるものといってもよい。すなわち、不特定多数の人たちを対象に書かれたものといえるが、近ごろの出版物は、不特定とはいうものの、ある程度の範囲内の読者層を考慮に入れて編著出版されている。

○

ふるほん　古本　新本に対する称。読まれたり、使われたりした本。よごれたり、手あかがついた本。

注意　原則としては、一度読者の手に渡った本ということになるが、所蔵者が買ったり、もらったりした本を、読みもしないで積んでおいた本も古本であるし、新刊本屋の上方のたなどに、たなざらしになっていて、よごれている本も、現実には古本となってしまう。古書籍。古典籍。

こしょせき　古書籍　古本と同義。

こてんせき　古典籍　古本と同義ではあるが、この文字を使うと、何となく程度の高い古本のように感ぜられる。

しんぽん　新本　古本に対する称。読者とか、蔵書家とかの手に渡ったことのない本。

注意　古本と同じように、正確な定義というものは下しにくい。古本として扱われたことのない本でも、新刊本屋の店頭で店ざらしになっている本や、小売店から発行所に返本された新本の大部分は、もはや新本では通用しない。従って、新刊本屋で扱う本のすべてが新本であるともいえないし、又、近ごろは、古本屋が新刊書を店頭の古本の間にはさみ込んで、値引きして販売していることも珍しくないから、古本屋の取り扱わない本と定義するわけにもいかなくなった。

ぞっきぼん　ゾッキ本　出版者の経営不振とか、増訂版の出版とかで、換金処分にされ、定価より非常に安く売り出された本。広義の新本の一種ではあるが、新本とはいわれないのが通常。特価本ともいう。この言葉の語義ははっきりしないが、長着も羽織もすべてつむぎを着ることを「つむぎのぞっき」とよんだこともあったことから、残りの本全部がそっくり処分された意味から出た称ともいう。

とっかぼん　特価本　前項と同義。

注意　あらかじめ定めた期日間、定価から値引いて売り出される価格を特価という。特価で売り出された新本も特価本とよばれそうだが、実際にはそうはほとんど使われない。

つくりぼん　作り本　紙型を買った本屋などから、掛け（割引価格）を低くして、再販売者が定価をくずして、安く小売りができる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com